

Eureka VII

六年制通信 No.32 令和3年1月29日(金)号

朗読のすすめ

昔、ラジオの深夜放送が流行りました。当時 PTA では大いに問題視されたようです。今考えればわかる気がします、内容に品がなかったのだから…。親が聴かせたくないような放送ほど、今も昔も子供は喜んで聴きたがるわけですからね。確かあの頃は月曜日の深夜が中島みゆきの担当で、歌しか知らなかった私たちは彼女の喋りと笑い声に驚愕したものです。懐かしい。それで、当時よく議論されたのが「ながら勉強」の是非でした。ラジオを聴きながら、音楽を流しながら、そういう「ながら勉強」をすると成績が落ちるとか、いやいやモーツァルトなら流した方が集中力がアップする、植物でもベートーベンよりモーツァルトの方が育ちがいいとか、例によって教育評論家（当時からいたのですね）の皆さんがテレビやラジオで話していました。ラジオを聴くのと BGM を流すのを同列には論じられないはずですがね…。皆さんはどうですか。テレビがついていても平気で勉強できますか？

深夜放送華やかかなりし頃、同時に記憶力増強グッズというのが流行りました。聴診器みたいな機器で、患者さんに当てる部分をマイクのようにしてあるだけの簡単なつくりなのですが、要するに自分の声以外を一切遮断し、覚えるべき単語や文章を読み上げるわけです。聞こえるのは自分の声だけ、そうすると集中力がアップし、自分の声が記憶され、読み上げた単語なども覚えられとのことでした。私は試したことがないので効果のほどはわかりませんが、現在流布していないようなのでイマイチだったのでしょうか。

私はこういう機器をほとんど信用していません。ただ、ラジオの効用はあると思っています。昔は英語の勉強に短波の入るラジオが重宝がられました。FEN (Far East Network) や VOA (Voice of America) を聴くためです。三重県は不利でしたなあ。ま、それはともかく、ラジオでは「映像のない説明・描写」が言葉のみで行われますが、というよりそもそも映像に頼ることのできないメディアなのですから仕方ないのですが、音声だけから正しいイメージを掴み取る能力は言語の運用能力としても上位に位置する重要なものです。ラジオはそれを養成するのに格好のツールですね。ところが最近ではラジオを聴かなくなりましたね。君たちは映像文化の中で生きています。その映像も日進月歩の技術革新で、フェイク画像なのにどう見ても本物に見えています。それはそれで素晴らしい技術なのでしょうが、私たちの想像力を減退させるのではないかと心配です。

以前から映画が原作よりよかった例は少ないと言ってきました。原作を読むという

ことは、文字を通してイメージを描く作業をしているということです。自分の描いた世界と映画になった世界が大きく違うと（だいたいそうなるんですね）、観ていてがっかりするわけです。文字を通して正しいイメージを掴むのも音声を通して正しい世界をイメージするのも、ともに大切な能力です。文学作品を読む、あるいはその朗読を聴く、さらに自分で朗読してみる、こういった訓練を通して君たちの言語能力は今以上に磨かれていくはずですよ。私が不安に思っているのは、言語能力が未発達のままの学生は、いずれ高等教育から脱落し、高度な読み書きの能力の欠如を理由に、学問や専門性を求められる知的労働の世界から排除されてしまうだろうということです。

そうならないように、言葉の訓練の一つとして文学作品の朗読をしてみてもいいのではないでしょうか。朗読（つまり声だけ）を聴いて世界をイメージできない、映像なしにドラマの世界をイメージできない若者が増えているらしいので、だったら声を届ける側に立ってみて、ただ聴くだけ以上の深い理解をしてみましょう。

朗読には滑舌、呼吸（息づかい）、アクセント、間の取り方、そういった「普段以上に気を配らなければいけないもの」がたくさんあります。相手が子どもか大人か、園児、小学生、中学生、高校生、大学生…いずれかによって題材自体も変わるでしょう。また、漢字の読み方も考えなければいけません。芥川の『蜘蛛の糸』でしたか、「お釈迦様の御足」とありますが、この「御足」は「おんあし」でも「おあし」（これだとお金みたいですよね）でもなく「おみあし」でなければなりません。朗読するには、例えばこういうことも考えないといけないわけです。いい訓練になると思いますよ。

冬休みのおすすめ

・北山猛邦 『私たちが星座を盗んだ理由』（講談社文庫）

五つの物語。短編集です。中でも私は「恋煩い」「嘘つき紳士」「私たちが星座を盗んだ理由」が怖かった。何と言いますか、女の悪意と言いますか、こわっ。罌を仕掛けて引っかかるのをいつまでも辛抱強く待つ執念深さと言いますか、それでいて普段はにこやかに親友を演じられる不気味さと言いますか、ほんまにこわっ。

前に「女か虎か」の話を書きましたが（一年生は先生か先輩に教えてもらってください）、あれ、女性の中には虎の扉を開けさせると回答する（しかも即答する）人が結構いるそうなんです。信じられますか、男性諸君。君たち、虎に食べられるんですよ。「ふん、何であいつだけ幸せになるわけ？ そんな嫌やわ。死んだらええねん。え？ 彼を愛してないのかって？ それとこれとは違うわよ」とか「何ですって？ その女って私より若いの？ ありえへんわ。私はどうなるわけ？ 自分以外の女と幸せになる姿を見せられるくらいやったら、死んでほしいわ（ここ、死にたいわ、ではないのですね）。おお、ちょうどええところに虎がおるやん。よっしゃ、食べてもらおう」とか、ま、同じことですが、そういう理屈らしい。いや、理屈じゃないんでしょうね。本能のような気がする。しかも、恐らく、いやきつと、につこり笑って虎の扉を指さすんでしょうね。で、男は死んでいくわけやね。こーわっ。

BGMは SPEED の WHITE LOVE でした…。